

前期

文系

二〇二二年度入学試験学力検査問題

小 論 文

(人文社会学部 九〇分)

答案用紙 二枚

注 意

- 一、監督員の合図があるまで、問題の内容を見てはいけません。
- 二、受験番号及び氏名は、答案用紙の所定欄に必ず記入してください。

(例)
受験番号
1234567 X
の場合

↓

	1	2	3
4	5	6	7 X

- 三、解答には黒鉛筆またはシャープペンシルを使用し、必ず配付された答案用紙に記入してください。答案用紙には、解答に関係のないことを記入してはいけません。
- 四、解答は、答案用紙に縦書きで記入してください。
- 五、試験中に不鮮明な印刷等に気付いた時は、手をあげて監督員に申し出てください。
- 六、答案用紙を切り取ったり、持ち帰ったりしてはいけません。
- 七、問題冊子の余白は利用可能ですが、どのページも切り離してはいけません。
- 八、問題冊子は、持ち帰ってください。また、試験終了時刻まで退室できません。

次の文章は「感情労働」(感情の抑制を労働内容の不可欠な要素とするような労働)にどのような問題が含まれるかについて、カズオ・イシグロの小説『日の名残り』の主人公ステイブンスを例に考察したものである。この文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

ステイブンスはイギリス政界の名士ダーリントン卿きょうに仕える執事である。彼は卿の屋敷ダーリントン・ホールで執事の仕事を完璧なまでに見事に遂行していた。その仕事ぶりは、彼の父が死の床に着いていたときでさえ、集まった来客にいつもの手厚いサービスを怠らない徹底したものであった。彼は立派な執事には「尊厳」というものがなければならず、その尊厳とはどんな私事も左右されずに己の職分をまっとうすることだと考えた。

しかし、このような徹底した仕事への献身により、ステイブンスは同じダーリントン・ホールで働く女中頭のミス・ケントンが彼に寄せる思いに気づかないままに終わってしまう。彼はミス・ケントンが彼に強い恋心を示しているにもかかわらず、しかもそれに応じて彼自身も彼女に強い情動(注一)を抱いているにもかかわらず、その情動が何であるのかを突きとめようとせず、それゆえ彼女の恋心を明瞭に認識しようとはしなかった。それは彼女への愛が執事としての自分の仕事を妨げると暗に考えて、無意識のうちにその愛を自分に許そうとしなかったからである。彼は、ミス・ケントンが彼への思いを受け入れてもらえずに悲痛な涙を流しても、それに戸惑いを覚えるだけで、自分の情動の正体を明らかにしようとしなかった。それどころか、彼はその戸惑いを断ち切って、自分は執事だという決然たる思いに立ち返り、「大きな勝利感」が心の奥底から湧き上がってくるのを感じるのである。

ステイブンスは一見、執事の鑑かがみのようにみえる。彼がミス・ケントンの思いに明示的には気づかなかったことはたしかに悲劇的ではあるが、それはけっして彼がそのために非難を受けねばならないことではないように思える。しかし、ブルーワー(注二)は彼を厳しく非難する。ステイブンスはミス・ケントンの思いを受けて、自分も彼女への強い情動を抱きながら、それでもその正体を明らかにしようとはしなかった。彼が自分の情動の正体を深く問い、それを明らかにしていれば、彼は当然ミス・ケントンの思いにも明示的に気づき、彼女との関係は根本的に違ったものになっていただろう。

たしかにステイブンスが自分の情動を明示的に理解し、ミス・ケントンの思いをはっきり認識するようになったとしても、彼が彼女の思いを受け入れたとは限らないだろう。彼はそれでもなお、ミス・ケントンとの関係よりも、執事として完璧な仕事を遂行することのほうを自分にとって重要なことだと思つて、彼女との関係を断ち切つたかもしれない。しかし、たとえそうであつたとしても、彼が自分の情動を明示的に理解したうえでそうしたということがここでは重要である。ブルーワーが彼を非難するのは、彼がミス・ケントンとの関係よりも執事の完璧な仕事を選んだからではなく、彼が自分の情動を明らかにしようとしないうままそうしたからである。執事の仕事は人間としての対等な尊厳を傷つけるから、ミス・ケントンとの関係より執事の仕事を選ぶことは間違つてゐるかもしれないが、ブルーワーがここで問題にするのはその点ではない。それよりもはるかに深い根源的な問題が存在するのであり、それはステイブンスが自分の情動を明らかにしようとせず、それゆゑ自分の置かれた価値的な状況を明示的に理解しようとしなかつたことである。このような自己洗練の欠如こそが問題なのである。そしてブルーワーに言わせれば、執事という感情労働がステイブンスの自己洗練を妨げたところに、感情労働というものの根本的な害が存在するのである。(中略)感情労働は自分の情動を生存のための手段にしてしまうことで、情動の本来の働きを妨げる。情動はその明確化を通じて人間としての本来の価値を見だし、その価値を成就することを可能にすることがその本来の働きであるが、感情労働はそれを妨げるのである。

感情労働は自分の情動を生きたるための手段にしてしまうことで、情動の明確化を通じて人間としての眞の価値を悟るのを妨害する。これが感情労働の害にかんするブルーワーの見解である。それは基本的には正しいように思われる。しかし、執事のステイブンスの例を見ると、一つ重要な疑問が浮かんでくる。ステイブンスはきわめて有能な執事であり、執事に求められる諸情動、たとえば主人への深い尊敬や客への厚いもてなしの気持ちをしつかりともつていた。しかし、そのような情動がミス・ケントンにたいする自分の情動を明確化することを妨げた。そこに執事としての感情労働の根源的な害があるとブルーワーは言う。たしかにそこに深刻な害があることは疑いないだろう。しかし、それよりもさらに根本的な問題がそこにはあるように思われる。すなわち、そもそも執事に求められる情動をステイブンスが明確化できなかつたことである。その情動を明確化できていれば、当然、

彼はミス・ケントンへの情動も明確化できたであろう。

感情労働のもっとも根源的な問題は、そこで求められる情動がその他の情動の明確化を妨げるということではなく、そこで求められる情動そのものが明確化を妨げられることであるように思われる。感情労働という労働形態は、そこで要求される情動がどのようなものであるかを明確化することを妨げるのだ。感情労働は自分の情動を生きたための手段にしてしまいが、それが有害であるのも、そうすることでその情動をやむをえないものとしてあきらめさせ、それ以上それを明確化しないようにさせるからである。

感情労働はさらに、そこで要求される情動の明確化を妨げるだけでなく、そうすることでその情動がじつは不適切だということの自覚化も妨げる。感情労働の従事者は最初のうちは、要求される情動を抱くことに違和感や嫌悪感を抱くであろう。そのような違和感や嫌悪感は要求される情動の正体を明確化する重要な手がかりとなるものである。しかし、感情労働はそのような違和感や嫌悪感を抑圧して、むしろ要求される情動を内面化するように仕向ける。こうして最初は嫌々の強いられた情動であったものが、自発的に湧いてくる自然な情動になる。それは自己欺瞞的に抱かれた情動であり、それ自身の正体を明確化する手がかりを奪われてしまった情動なのである。

ステイブンスは完璧な執事であった。彼は執事として要求される情動をすべて自然に抱くことができた。しかし、そのこととはりもなおさず、彼がそのような情動を明確化するいつさいの手がかりを失ってしまったということである。彼にとつてそのような情動は違和感や嫌悪感を覚えるどころか、誇らしくさえあるものだ。それは彼の執事としての尊厳を根底から支えている。しかし、そうであるからこそ、彼はその情動をそれ以上明確化することができず、その正体に気づくことができないのだ。こうして彼は人間としての真の価値に目覚めることができないまま、生涯を過ごすこととなる。

じつはステイブンスにも、執事として彼に要求される情動を明確化する重要な機会が何度か訪れていた。しかし、結局のところ、彼はそれらの機会をうまく活かすことができなかった。彼が敬愛する主人のダーリントン卿が一度、大きな間違いを犯したことがあった。卿は二人のユダヤ人の召使いをユダヤ人だという理由だけで解雇してしまったのである。彼らは本当によく働く申し

分のない召使いであった。そうであるにもかかわらず、ダーリントン卿は彼に植えつけられたユダヤ人への偏見のゆえに、彼らをユダヤ人だという理由だけで解雇してしまった。ステイブンスは彼らの解雇に内心では大反対であったが、そうであるにもかかわらず、卿への忠誠心から、解雇の決定に肅々と従った。女中頭のミス・ケントンが怒りを顕わにして解雇に反対しても、ステイブンスはそれに取り合おうとしなかった。彼はミス・ケントンに、自分たちは主人のダーリントン卿に反対する立場にはないと言って、あくまでも卿への忠誠心を貫き通そうとした。ミス・ケントンが怒りを顕わにして反対したことは、ステイブンスにとつて、彼がダーリントン卿に抱いていた忠誠心を明確化して、その正体を悟る絶好の機会であったはずだ。しかし、彼はその機会を逸してしまふ。彼の絶対的な忠誠心とその忠誠心を顧みることを絶対的に妨げてしまふのである。

感情労働のもっとも根本的な害は、それに求められる情動の明確化を妨げる点にある。求められる情動が自然に湧いてくるようになればなるほど、その害にどっぷりと浸かってしまうことになる。そこから脱出するには、抑圧された違和感や嫌悪感を探り出し、それを手がかりにして要求される情動を明確化しなければならない。つまり、要求される情動が真正性の欠如した欺瞞的な情動であることを暴き出さなければならない。そして自分が本来抱くべき情動、自分の置かれた価値的状况に本當の意味で相応しい情動を抱くようにしなければならない。そのような適切な情動を抱くようになること以外に、感情労働の根本的な害から脱出する道はない。もちろん、そのような適切な情動を抱くときには、感情労働はもはや感情労働ではなく、人間の本来の尊厳を尊重する望ましい活動となるだろう。感情労働の根本的な害から脱出することは、感情労働そのものから脱出することなのである。

（信原幸弘『情動の哲学入門 価値・道徳・生きる意味』より。一部改変。）

（注一）本文では「感情労働」という慣用表現において「感情」の語が用いられているが、それ以外は「情動」の語が用いられている。問いに答えるうえで、この二つの語の区別は考慮しないでよい。

（注二）ブルーワー…アメリカの倫理学者・政治哲学者。

問一 筆者が考える感情労働の根本的な問題とは何か。ブルーワーカーの見解と対比しつつ、二〇〇字以内で述べなさい。

問二 感情労働の害から脱出するために、どのようにすればよいと筆者は考えているか。一〇〇字以内で述べなさい。

問三 私たちは自分自身の情動に向き合う際に、また他人の情動に向き合う際に、どのような問題に留意するべきか。またそれはなぜか。筆者の見解を踏まえたうえで、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

